



## 猪高の森自然観察だより 4月号

開催日時：2024年4月28日（日）

天候：晴れ 気温：最低 14.8℃、最高 28.3℃（名古屋に於いて）

テーマ：オタマジャクシはうまれているかな？

参加者構成：一般 17名（内 NACS-J 会員 3名、小学生以下 2名）

コース：森の集会所 → 畑 → 井堀の大楠 → 井堀下池 → 井堀の谷地田（棚田） →  
ハンノキ湿地 → こもれび池 → シダレザクラの里 → 森の集会所

（左上の画像はハルジオンとキリギリスの仲間の幼虫。画像は当日撮影以外のものを含みます。画像は、猪高緑地以外で撮ったものを含んでいます。）

4月に入ると、記録的な夏日（最高気温 25℃以上）の多さが目立ち、朝夕と昼間の温度差が大きい日が続いています。今年は3月と4月に寒い日暑い日が交互にあったために、枝垂れ桜やヤマザクラ、ソメイヨシノが、同じような時期に咲き、例年、温暖化により「卒業式」に咲いていたソメイヨシノが、久しぶりに「入学式」に咲く事となりました。

テーマの「オタマジャクシ」は谷地田（棚田）にいました。春は観ることが沢山あります。五感を使つての観察です。

### ○タンポポの茎（花の茎：花茎（かけい））はどうして横になる？



タンポポは花が咲き終わると、一度花の茎が横になります。さて、どうしてでしょう？

しばらくして、種が熟してくると再びグッと長く伸びて立ち上がってきます。

受粉した花は熟するまで時間がかかります。周りにあまり

高い草のない場所に生えやすいタンポポは、踏まれたりひっかけられたりして、そのまま花茎を伸ばしていると折られてしまうことになりやすい環境にある、と言えます。

そこでタンポポは茎を横にして、実や種を一時的に保護していると考えられています。

身近なタンポポですが、深掘りすると芸達者な一面も見えてきます。



### ○花外蜜腺 (かがいみつせん) って何？

花以外にアリを引き付ける蜜を出す部分呼びます。

左はカラスノエンドウの花を斜め下から写したものです。花の根元に小さい葉 (托葉: たくよう) があり、その裏側に黒い部分があります。

右はその部分にアリが口を付けている様子です。この黒い部分から蜜が出ているためです。

ここを舐めると甘く感じます。では、この花外蜜腺の役割は何でしょう？

「アリを引き寄せて、食害をする他の虫たちを近づかないようにしている」とされています。アリ達はガードマンの役割をさせられているわけです。「報酬は甘い蜜」と言うわけです。ただし、アリ達はアブラムシ達だけは例外。なぜなら、彼らはアリの好む甘い分泌物をだしてくれるからです。

花外蜜腺を持つ植物は意外と多く、サクラ (葉柄にある)、アカメガシワ (若い葉の縁など) など身近な花や樹にもあります。

### ○オオイヌノフグリの名前の由来を確認しました。



ちゃんと2つ並んでいる実



花はよく見るけれど..

オオイヌノフグリの命名者は「牧野富太郎博士」です。元々、イヌノフグリと呼ばれる草があり、それによく似た大型の草と言う意味で付けられました。

残念ながら、元のイヌノフグリは現在、国指定の絶滅危惧種Ⅱ類に指定されるほど少なくなっています。本来なら、イヌノフグリを取り上げて、名前の由来となった実の形をご覧になって頂くのですがそれはできません。代役をオオイヌノフグリにやっていただくことにします。

画像のように犬のふぐり (陰囊) の形をした実をならせませす。4枚のガクに覆われていたのを、分かりやすいように広げました。花はよく見ると思いますが、中々実や種まで確認する機会は少ないので、今回取り上げました。余談ですが、イヌノフグリの実はもっと本物に似ているそうです。

### ○キツネノボタンとケキツネノボタンの違いは？



ケキツネノ  
ボタン



キツネノボタン

よく文献に載っている区別の方法は、「実の尖っている部分の違い」ですが、図のように、「先があまり曲がっていない」のがケキツネノボタン、「曲がっている」のがキツネノボタンです



両種ともキンポウゲ科の仲間になります。  
ピカピカ輝く可愛い花ですが、毒草です。

実際に比べると、程度の差はありますが、この方法ではとても分かりにくいのです。

ケキツネノボタンは毛のあるキツネノボタンの意味で茎にしっかり毛が生えていますから、その点で区別した方が良いでしょう。

「ボタン」の名は葉が牡丹の葉に似ているから付けられました。毒がありますが、幼植物のときは、「春の七草のセリ」に似ているので、間違っ採られ、事故が起きることがあるので要注意です。

### ○谷地田（棚田）でオトシブミを見つけました。



コナラの葉に、「ヒメクロオトシブミ（左下の画像）」が揺籃（ようらん）を作っていました。（左上の画像）

オトシブミの中では小型の仲間で、成虫でも大きさは5ミリ前後、この時期は成虫越冬した個体が揺籃を作ります。

葉の両側から中央の主脈の向かって切り進み、少ししおれたところで、くるくると巻いて、中に卵を産みながら海苔巻きのような幼虫の為の食料兼隠れ場を作ります。

この海苔巻きは切り離すときもくっつけたままにする時もあるとのこと。

最後まで作る作業を見たかったのですが、残念ながら時間の余裕がなく、断念しました。

左は出来上がった揺籃です。

成虫や作っている姿は中々見ることはできませんが、揺籃を見つけたら、近くに成虫がいるかもしれませんので、探してみてください。





○棚田にはオタマジャクシが沢山いました。



この日の棚田には、左のようなオタマジャクシと卵のかたまりが沢山ありました。

調べていただいたところ、どうやら、トノサマガエルのオタ

マジャクシと卵とのことです。

トノサマガエルは名古屋市レベルで絶滅危惧Ⅱ類に指定されています。しかしながら、この卵塊から、大人のカエルになるのはわずか1~2匹です。

カエルの仲間は水界と陸界の両方の条件が整っていないと生きていくことが出来ず、皮膚呼吸に多く頼っているために、空気の汚染にも敏感です。自然界にもヘビや鳥などの捕食者も存在します。世界的にカエルの仲間



は激減しているとのことなので、農薬や化成肥料を使ってないこの棚田の環境を守っていくことは、とても大事な事と思います。

○オシャレなイモムシを見つけました。



サワフタギなどのハイノキ科の樹にこの時期のみに見つかる「シロシタホタルガ」の幼虫で、あだ名は「猫バスイモムシ」。

カラフルな体色は警戒色なのでしょう、危険を察すると体表から毒性のある粘液を出し、皮膚に触れるとかぶれることがあるので、要注意です。

左下は成虫の姿、白い筋がほぼまっすぐに翅を横断しているのが、目印です。(別種によく似たホタルガはV字

形になる。)

シロシタホタルガは、6月頃に成虫になり、産卵、孵った幼虫は2齢で夏眠~冬眠を経て、翌春に2齢から成長を再開するとのこと。成長サイクルもこのようにちょっと変わっているので、併せて覚えておくとよいでしょう。





アカメガシワにいたキバラモクメキリガの幼虫  
深緑色の体にホワイトの1本線。中々オシャレなデザインです。緑の体は終齢になると、褐色に変わります。



アベマキにいたヤママユの幼虫  
天蚕と呼ばれ、繭からは美しい緑色の絹糸が取れます。透き通るような美しい緑色をしたイモムシ。

○エノキに変な尖ったものが付いていました。



これは、虫こぶのひとつ。「エノキハトガリタマフシ」でした。タマバエの仲間がつくり  
ます。一つの虫こぶには一つの卵がうみつけれ、1匹の幼虫が入っています。6月には  
虫こぶごと地面に落ちて幼虫の状態です。夏と冬を越し、来年の3～4月に羽化して、産卵を  
するとのことです。これも、春しか見る事の出来ないものでした。

春はまだまだ沢山の事が観察できます。

ゆっくりキョロキョロしながら、歩いてみてください。

次回観察会は5月26日(日) 森の集会所集合

9:30～です

名東自然倶楽部のHPでは毎月の猪高の森の自然観察会の紹介  
をしています。

<http://sizen.ciao.jp/> から是非ご覧になってください。

(右上の自然観察グループをクリックしてください。)

